

2019 年度名古屋大学学生論文コンテスト

佳作受賞

「律子と貞子」再考—その意義をめぐって

文学部2年 岩田 海莉

「律子と貞子」再考—その意義をめぐって

1. はじめに

1-1. 「律子と貞子」について

「律子と貞子」は、太宰治による短編作品である。昭和17年2月に雑誌『若草』に掲載され、同年4月『風の便り』（利根書房）に再録、出版された。以降の再録本はない。あらすじは次のようである。

〈私〉のもとを訪ねてきた知人の三浦憲治君は、二人姉妹のうちどちらかと結婚するべきか迷っているという。あまり感情を表に出さないしっかり者の姉・律子と、三浦君への好意を積極的に表す明るい性格の妹・貞子。三浦君に意見を求められた〈私〉は、「一瞬も迷は」なかったが、具体的に指図する勇気はなかったため、代わりに三浦君にルカ伝十章を読ませる。妹の貞子のほうが良いと暗示するが、結局三浦君は姉の律子との結婚を決め、手紙で〈私〉に報告する。その知らせを受け取った〈私〉は義憤のようなものを覚え、読者に対し「読者は如何に思ふや。」と問いかける。

1-2. 従来の読みと先行論

この作品のテーマについては、「軽いユーモラスな短編だが、愛と表現、人間の守るべき真実は何かという、太宰の重要なモチーフが提出されている。」（奥野、1968、p. 164）、「愛と表現の大切さを示」した作品（實方、1972、p. 95）、「「愛の表現の拙さ」（『惜別』）とはそのまま人間のいとおしさであることを描いた小品である。」（木村、1994、p. 64）というように、多くは愛とその表現であると読まれている。一方で太宰の深い聖書理解を前提にし、律子を聖書における律法、貞子を福音に置き換えて読み、〈私〉が三浦君に貞子を選んで欲しいと思った背景には「律法ではなく福音を選んで欲しかった」太宰の意志があるとする説（佐古、1992、p. 186）もある。

次に先行論文ではどのように論じられているかを確認する。陸根和氏（1995、p. 28）は「無償の愛をささげながら、その愛の表し方の稚拙さのゆえに愛に敗れた者へのいたわりであり、いとおしみ」が主題であるとしてこの作品に太宰の恋愛観を、また麻生和子氏（2007、p. 141）は「自分の人生は自分で決め、選択するのは自分で、最終的に責任を負うのは自分であることを提示した作品」と述べ、人生観を見ている。武田秀美氏（2005、p. 151）は太宰が貞子を通じて「新しい女性観」を示していると評価し「現実において良しとされる常識や一般的な価値観の物足りなさや、その中に潜む偽善性や形骸化されたもの、一方では、常識的価値観や世間一般が潔しとしない存在の本質的価値を描き、それに気づかせようとするところ」に意義があると述べている一方で、タリヤルヴ・マルギス氏（2016、p. 113）は「高い国民意識を表現する女性像がマリヤに喩えられているという「律子と貞子」は、国家言説を拡張する読みを引き寄せる」としている。千葉正昭氏（1987、p. 79）が「語り手『私』は、聖書の逸話に深い関心を示しながらも、逸話を客観的に話の筋として引用した」と述べ、小林幹也氏（1997、p. 15）は、太宰がルカ伝十章においてはイエスに受け入れられず拒否されたマルタに着目したのだと指摘しているように、「律子と貞子」と聖書の関わりについて論じられる傾向もある。

2. 問題提起

「律子と貞子」は、太宰の恋愛観・人生観としての他、聖書との関連について、あるいは新しい女性像を示し社会/戦争に反抗した作品である、あるいは貞子の言動等から戦争を積極的に肯定する姿勢を取っている作品であるといった両極の評価のなかで論じられてきた。

このように見てくると、この作品は「読者は如何に思ふや。」と読者へと問いかけることによって結ばれていることが印象的な作品でありながら、読者を意識した考察が不十分であることに気づく。そこで本稿では、「律子と貞子」の従来解釈が適切であるのか、そして発表された当時におけるこの作品の意義について、結びの問いかけと、この作品が雑誌『若草』に掲載されたことをふまえつつ考えていきたい。

3. 人物造型

3-1. 律子と貞子

はじめに、この作品を論じるにあたって最も重要な登場人物の造型を確認していく。

姉は律子。妹は貞子。之は、いずれも假名である。本当の名前は、もつと立派なのだが、それを書いては、三浦君もこまるだらうし、姉妹にも迷惑をかけるやうな事になるといけないから、こんな假名を用ゐるのである。¹

三浦君の艶聞に登場する姉妹の名前はそれぞれ「律子」「貞子」。〈私〉は二人の名前は「迷惑をかけ」ないための仮名であるとするが、やはりここは意図的な命名であると考えるのが自然である。これについては武田秀美氏(2005、pp. 149-150)が

「律」は、「のり、おきて、さだめ。」(『新字源』角川書店、昭和四三年一月)の意を表し、世間のしきたりや自らの職務に従おうとする律子には、ふさわしい命名である。また、貞子の「貞」は、「まこと。まごころ。真のもの。」(同前)の意を表し、何よりもひたむきに三浦君を想う貞子にふさわしい名前である。

と興味深い論を展開している。命名の時点から既にこの姉妹は対照的に描かれている。

「あら。」と、あたりかまはぬ大聲を出して、買ひ物を店先に投げとばし、ころげるやうに走つて來たのは、律ちゃんではなかつた。貞ちゃんのはうであつた。

律子は、ちらと振り返っただけで、買ひ物をまとめて、風呂敷に包み、それから番頭さんにお辭儀をして、それから澄まして三浦君のはうにやつて來て、三浦君から十メートルもそれ以上も離れたところで立ち止り、シヨオルをはづして、叮嚀にお辭儀をした。²

これは三浦君が久しぶりに姉妹に再会した場面である。この場面一つをとっても、律子は礼儀正しく落ち着いており、貞子は自由で活発な女性であることが伺える。

貞子が一方的に三浦君に語り続ける場面は2つある。この貞子の台詞こそが貞子の性格を読者に最も強く印象付ける要素であると言ってもよいだろう。長くなるが、その場面を次に引用する。

「行こ行こ。」妹の貞子は、二人を促し、さつさと歩いて、さうして、ただもう、にこにこしてゐる。

「久し振りね、實に、久し振りね、夏にも来てくださらなかつたしさ、それから、春にも来てくださらなかつたしさ、さうだ、ひどいひどい、去年の夏も來なかつたんだ、なあんだ、貞子が卒業してから一回も吉田へ來なかつたぢやないか、ばかにしてるわ、東京で文學をやっているんだつてね、すごいねえ、貞子を忘れちやつたのね、墮落してゐるんぢやない？ 兄ちゃん！ こつちを向いて、顔を見せて！ そうれ、ごらん、心にやましきものがあるから、こつちを向けない、墮落してるな、さては、墮落したな、(中略)」とめどが無いのである。³

律子は、そんな子だつた。しつかり者。顔も細長く蒼白かつた。貞子は丸顔で、さうしてただ騒ぎ廻つてゐる。その夜も貞子は、三浦君の傍に付き切りで、頗るうるさかつた。

「兄ちゃん、少し瘦せたわね。ちよつと凄味が出て來たわ。でも色が白すぎて、そこんところが氣にいらぬけど、でも、それでは貞子もあんまり慾張りね、がまんするわよ、兄ちゃん、こんど泣いた？ 泣いたでせう？ いいえ、ハワイの事、決死的大空襲よ、なにせ生きて歸らぬ覺悟で母艦から飛び出したんだつて、泣いたわよ、三度も泣いた、姉さんはね、あたしの泣きかたが大袈裟で、氣障つたらしいと言つたわ、姉さんはね、あれで、とつても口が悪いの、あたしは可哀想な子なのよ、いつも姉さんに怒られてばかりゐるの、立つ瀬が無いの、あたし職業婦人になるのよ、いい勤め口を捜して下さいね、(中略)」やはり、どうにも、うるさいのである。⁴

貞子の発言に高い国民意識を見て、「律子と貞子」は戦争を肯定した作品であるとする指摘や、貞子を軍国主義における女性の理想像とする指摘⁵も先行論の一部にあるが、それは少々一面的な読みであるように思われる。

当時の時代背景を踏まえれば日常会話を描く際に戦争の話題が用いられるのは珍しいことでもないと思われ、ここでより注目すべきなのは貞子の台詞がもたらす人物造型上の効果についてである。

1つ目の台詞では、まず、久しく会いに來なかつた三浦君を軽く責める。次に、東京で文學をやっているのはすごいが、貞子を忘れて墮落したのなら三種になるのも当然だと言う。そして自分の手紙について話した後、三浦君には自分と妹の節子しかいないと語り、話題は更に母の失態についてへと変わっていく。2つ目でははじめに三浦君の容貌について、次に「ハワイの決死的大空襲」について話した後、「職業婦人になる」と自分のことを語る。それから、夢に出てきた「兄ちゃん」について、そして最後にはサフオの詩について、というように、貞子は思いつくままに話題を移してひっきりなしに三浦君に語りかけている。お国の一大事であるはずの戦争を、貞子は深刻に考えていないように感じられる。貞子にとっては三浦君へ語る一話題に過ぎない。この貞子の台詞は、思慮深い姉の律子の性質との対比のなかで貞子の幼さ、落ち着きのなさを強調し貞子の個性を一層際立たせるという意味合いが大きいと思われる。

「は、船津まで、買ひ物に。」律子は澄まして嘘を吐いてゐる。完全に、三浦君の存在を忘れてゐるみたいな様子だ。けれども、貞子は、下手くそだ。絶えず、ちらちらと三

浦君のはうを見ては、ふつと噴き出しさうになつて、あわてて窓の外を眺めて、笑ひをごまかしてゐる。[…]

律子は土地の乗客たちに軽くお辞儀をして、静かに降りた。三浦君のはうには一瞥もくれなかつたといふ。降りてそのまま、バスに背を向けて歩き出した。貞子は、あわてそそくさと降りて、三浦君のはうを振り返り振り返り、それでも姉の後に附いていつた。

三浦君のバスは動いた。いきなり妹は、くるりとこちらに向き直つて一散に駆けた。バスも走る。妹は、泣くやうに顔をゆがめて二十メートルくらゐ追ひかけて、立ちどまり、

「兄ちゃん！」と高く叫んで、片手を舉げた。

貞子の三浦君への愛が最も顕著に表れている場面である。別れの時であっても、三浦君への好意を積極的に表に出すことはなく、「つまらぬ誤解」⁶を受けまいと世間体を気にする律子は、当時の模範的な女性像である。

落ち着いていて家の仕事をこなすしっかり者で、所謂良妻賢母的な律子と、明るく自由で、仕事や世間体よりも三浦君への愛を優先する貞子。〈私〉は三浦君の艶聞を一通り聞いた後意見を求められるが、一瞬も迷わなかつたものの、責任をもってはっきりと指図はできなかった。具体的な助言をする代わりに、〈私〉は三浦君にルカ伝十章を読ませる。

——イエス或村に入り給へば、マルタと名づくる女おのが家に迎へ入る。その姉妹にマリヤといふ者ありて、イエスの足下に坐し、御言葉を聴きをりしが、マルタ響應のこと多くして心いりみだれ、御許に進みよりて言ふ「主よ、わが姉妹われを一人のこして働かするを、何とも思ひ給はぬか、彼に命じて我を助けしめ給へ」主、答へて言ふ「マルタよ、マルタよ、汝さまさまの事により思ひ煩ひて心勞す。されど無くてならぬものは多からず、唯一つのみ、マリヤは善き方を選びたり。此は彼より奪ふべからざるものなり。」(ルカ傳十章三八以下。)⁷

従来の指摘通り、イエスの一行をもてなすために忙しく働くマルタは律子に、主(イエス)の足下に座って話に聞き入るマリヤは貞子に対応しているのは明らかである。しかし、話の中での立場(役割)が共通する一方で、マルタと律子、マリヤと貞子のそれぞれの二人の性質は似ていない。三浦君に接近する貞子は、イエスの足下に坐すマリヤの構図に重なるが、忙しく三浦君に語り掛ける貞子とじっとイエスの言葉に耳を傾けるマリヤとはどうも一致しない。マリヤは「心いりみだれ」しているとされるが、その性質は律子というよりは貞子に近いようにも思われる。

またこの引用に関連して、太宰と聖書のかかわりについて触れておく。「律子と貞子」が執筆された昭和17年ごろは太宰が聖書に接近していた時期であると言われている。事実、太宰の妻である津島美知子氏は著作の中で、「太宰が進んで代金を支払って定期購読者になった雑誌は、無教会派の月刊誌『聖書知識』だけである。これは齋藤淳氏の影響に拠つたのだろう。(中略)『聖書知識』が届き始めたのは、昭和十五年からではないかと思う。」⁸と語っている。『聖書知識』は、昭和5年にキリスト教無教会派に属した塚本虎二氏によって刊行された雑誌のことであり、無教会派は、内村鑑三によって提唱された、プロテスタントの流れを汲む日本独特の信仰のあり方である。カトリックと比較するとより聖書が信仰の中心にあるプロテスタントの中でも、さらに聖書重視の傾向が強い。太宰はこの『聖書知識』の

購読によってキリスト教の知識を深めていくことになるのだが、後に些細な読者名簿整理のための編集からの問い合わせが癪に障ったという理由で購読を停止することになる。加えて津島美知子氏は、「三鷹時代の彼の周辺にはクリスチャンが大勢いたが、教会や牧師とは全く無関係だった。」⁹とも語っている。太宰は、緒崎潤氏の影響で『聖書知識』と出会った。当時緒崎氏は熱心なクリスチャンであり、塚本氏の日曜集会にも参加していた幸自身にはそのような行動は見られなかったようである。

太宰の聖書にかなり親しんだということは事実であるが、主な情報源となった雑誌が聖書重視の無教会派であったことをふまえると、聖書についての理解が深まることは自然であり、聖書への理解をそのまま太宰自身の信仰心につなげたり、この作品の主題がキリスト教の教えにあるとしてしまうのは適切とは言えないだろう。律子と貞子も、マルタとマリヤそのものではなく性格面で改変を加えており、また「受け入れられたマリヤよりも、受け入れられず拒否されたマルタに着目した」（小林、1997、p. 15）ことから、やはり主題というよりは物語を描くにあたっての素材としての利用の意味が大きいと考えられるため、この作品の解釈として佐古説は適当でないと思われる。¹⁰

3-2. 三浦君

次に、〈私〉へ相談を持ち掛けた本人、三浦君についても見ていきたい。

途中で逢ったといふのである。姉妹は、呉服屋さんの店先で買ひ物をしてゐた。「律ちやん。」なぜだか、姉のほうに聲をかけた。¹¹

律子は、臺所で女中たちと友にお膳の後片付けやら、何やらかやらで、いそがしい。ちつとも三浦君のところへ話に来ない。三浦君は少し物足りなく思った。¹²

「きつと、船津で降りるのよ。町の、知っている人がたくさんバスに乗つてゐるんだから、私たちはお互いに澄まして、他人の振りをしてゐるのよ。船津でおわかれする時にも、だまつて降りてしまふのよ。私は、それでなくちや、いや。」
「それで結構。」と三浦君は思はず口を滑らせた。¹³

これらの記述をはじめとして、読者は作品を読んでいるうちに、三浦君は〈私〉に相談を持ち掛ける以前から律子に惹かれていることがわかる。

そしてこれに加えて、注目すべきは〈私〉の助言代わりであるルカ伝十章を読んだ後の三浦君の反応である。

私は、ただ讀ませただけで、なんの説明も附加しなかつた。三浦君は、首をかしげて考へてゐたが、やがて、淋しさうに笑つて、「ありがたう。」と言つた。¹⁴

三浦君は、東京で文学を学ぶ青年である。ここで「淋しさう」に笑つたのは、その三浦君がルカ伝十章の意味するところが分からなかったためなどではない。ルカ伝を読ませた〈私〉の真意がわかったために、「淋しさう」に笑つたのだろう。三浦君は〈私〉が勧める貞子ではなく、姉の律子に好意を抱いていた。三浦君は、〈私〉の勧めに反し自らの意志で、かねてから思いを寄せていた律子を選ぶのである。

ここで、先述の通りキリストの言葉に耳を傾けるのではなく「饗應のこと多くして心いりみだれ」ていたマルタをあえて取り上げ、その立場を引き継いだ律子を自由な恋愛の末に三浦君に選ばせたこの作品が、「従来の女性像」(＝律子)を否定したうえで貞子のような「新しい女性像」のみを推奨していると捉えてしまってよいのかという疑問が浮かぶ。

4. 読者の存在

4-1. 読者への問いかけ

作中には読者への語り掛けが見られ、読者の興味を引こうとする意図が感じられる。次の場面がそれにあたる。

「まさか。」三浦君は苦笑して、次のやうな羨むべき艶聞を語つた。艶聞といふものは、語るほうは楽しさうだが、聞くほうは、それほど楽しくないものである。私も我慢して聞いたのだから、読者も、しばらく我慢して聞いてやって下さい。¹⁵

けれども、それから十日ほど経つて、三浦君から、姉の律子と結婚する事に決めました、といふ實に案外な手紙が來た。なんといふ事だ。私は、義憤に似たものを感じた。三浦君は、結婚の問題に於いても、やつぱり極度の近視眼なのではあるまいか。読者は如何に思ふや。¹⁶

語り手<私>は、律子ではなく貞子を選んだ。そして、貞子を選ばなかった三浦君に対して「義憤に似たもの」を感じるが、最終的には読者に対して「三浦君の選択をどう思うか」、「三浦君か<私>どちらが正しいか」を問いかけている。言い換えれば、律子と貞子、どちらの女性を選ばれるべきか、どちらの生き方のほうがよいのかを読者に問いかけているのである。律子は三浦君に選ばれ、貞子も恋は実らなかつたものの、<私>によってその存在を肯定されている。律子と貞子のどちらともが受け入れられている。そのうえで、「読者は如何に思ふや」と読者に視線を移し、二人のどちらの生き方を選ぶのかを読者に考えさせているのである。

4-2. 文芸雑誌『若草』とその読者

先に述べたように、「律子と貞子」は雑誌『若草』に掲載された作品である。『若草』は、同じ発行所から発行していた『令女界』の姉妹誌として、はじめは単なる若い女性向け雑誌として創刊され、その翌年から雑誌協会から文芸部門の雑誌として扱われるようになった雑誌である。またその読者層については『令女界』同様に十代後半以降の女性を読者と想定しつつも、「同年代の男性にも開かれていた」(水谷、2010、p. 23)。『若草』は男性読者も受け入れる姿勢をとる開かれた雰囲気と文芸雑誌的な側面を持つ少女雑誌であり、その一方で、やはり主要読者層は女性を想定していた。

少女雑誌の読者について、太田瑞穂氏(1998、p. 87)は次のように述べる。

『青鞥』や『婦人公論』のように、読者が自発的に女性の自立や解放を望んでいた場合と異なり、少女雑誌の読者は、投稿や誌上交際には精を出す文学少女ではあつても、思想的にはまったく受身の存在だっただろう。

「思想的に受け身」である若い女性たちに向けて、この作品は律子と貞子の二人の女性の姿を選択肢として示しているのである。

また、『若草』は紅野敏郎氏(2006、p. iii)「時局への顕著なかたちでの協力という姿勢は他誌に比べて意外に少ない」としている。このような自由な雰囲気を持つ雑誌であるからこそ、貞子のような女性像を読者に提示できたのだろう。

5. 結び

「律子と貞子」は聖書の教えや戦争のプロパガンダ作品では当然なく、その意義についても、社会的規範に囚われない自由な恋愛観を示したことに留まらない。理想の女性像を読者に伝えるということが趣旨ではない。

この作品が、良妻賢母的な女性像に対して否定的でないこと、あるいはそもそも男性が結婚相手を選ぶ立場、女性を選ばれる立場に固定している男性中心主義的な思想が根底にある作品であることを批判するところに本稿の目的がある訳ではない。繰り返しになるが、『若草』の主要読者層はちょうど貞子と同年代の若い女性たちである。イエスの言葉に耳を傾けることを選んだマリヤ、当時の社会規範よりも三浦君への愛を優先することを選んだ貞子と同じように、読者も自分の生き方を選択する立場にある。ただ一方的に貞子という自由な女性像を提示したのみならず、従来の女性像を体現する律子についても否定することなく、どちらの生き方を選ぶのかを読者に問いかけている。受け身になりがちな若い女性たちに対して主体性を与えている。「読者は如何に思ふや。」と、最終的な判断、選択を読者に委ねている点にこそ、この作品の本質的な価値があると言えるのではないか。

[注釈]

¹ 太宰治「律子と貞子」『太宰治全集 6』筑摩書房、1998年、p. 28

なお、以降の本文は引用の都合上、旧字は一部新字に改めている。

² 前掲注 1 に同じ。p. 28

³ 前掲注 1 に同じ。pp. 28-29

⁴ 前掲注 1 に同じ。pp. 30-31

⁵ 先に挙げたタリヤルヴ・マルギス氏の論がその 1 例である。

⁶ 前掲注 1 に同じ。p. 31

⁷ 前掲注 1 に同じ。p. 33

⁸ 津島美知子(2008)「点描 「聖書知識」」『回想の太宰治』講談社、pp. 183-184 (初出：『回想の太宰治』、人文書院、1978)

⁹ 前掲注 8 に同じ。p. 186

¹⁰ 千葉正昭氏(1987)は、昭和 16~19 年に数々の翻案小説や歴史上の人物を題材とした作品(「お伽草子」「右大臣實朝」等)を発表していることをふまえ、太宰にとっての聖書は、古典作品や歴史上の人物がそうであったように物語の枠組としての役割が強いと述べている。いずれにしても、聖書の教えがこの作品の中心的意義であるとは言えないだろう。

¹¹ 前掲注 1 に同じ。p. 28

¹² 前掲注 1 に同じ。p. 31

¹³ 前掲注 1 に同じ。p. 32

¹⁴ 前掲注 1 に同じ。p. 33

¹⁵ 前掲注 1 に同じ。p. 26

¹⁶ 前掲注 1 に同じ。pp. 33-34

[参考文献・引用文献]

- 麻生和子(2007)「特集・太宰治文学に描かれた女性像「律子と貞子」」『解釈と鑑賞』72-11、pp.138-141。
- 太田瑞穂(1998)「『令女界』とその周辺」『学芸国語文学』30、p.79-88。
- 奥野健男(1968)「全作品解説」『太宰治論〈増補決定版〉』、春秋社、p.164[初出:「解説」『定本太宰治全集5』1962年]。
- 木村小夜(1994)「太宰治全作品事典」『別冊国文学 太宰治辞典』(東郷克美編)、学燈社、p.64。
- 紅野敏郎(2006)「解題」『若草:総目次』(早稲田大学図書館編)、雄松堂、p.i-iv。
- 佐古純一郎(1992)「『律子と貞子』『正義と微笑』『太宰治の文学』」朝文社、p.173-198。
- 實方清(1972)「第一篇 作品編」『太宰治辞典』、清水弘文堂、p.95。
- 武田秀美(1995)「律子と貞子」『太宰治全作品研究事典』(神谷忠孝・安藤宏編)、勉誠社、p.295。
- 武田秀美(2005)「太宰治と「律子と貞子」一作品・『聖書』・キリスト教」『太宰治研究』13、p.143-156。
- 田中良彦(1994)「太宰治と「聖書知識」」『太宰治と「聖書知識」』朝文社、pp.86-142[初出:「太宰治と「聖書知識」」『太宰治と聖書』、教文館、1983年]。
- タリヤルヴ・マルギス(2016)「太宰治「律子と貞子」論一貞子が語る〈十二月八日〉」『早稲田大学大学院文学研究科紀要(第3分冊)』61、pp.101-115。
- 太宰治「律子と貞子」『太宰治全集6』筑摩書房、1998年。
- 千葉正昭(1987)「昭和十六、十七年の太宰治と聖書」『日本近代文学』37、p.68-80。
- 津島美知子(2008)「点描 「聖書知識」」『回想の太宰治』講談社、pp.183-186(初出:『回想の太宰治』、人文書院、1978)。
- 辻淳(1977)「若草」『日本近代文学大事典』(日本近代文学館編)、講談社。
- 水谷真紀(2010)「「新しい女」と向き合う一文芸誌『若草』における女性像をめぐる試み」『東洋通信』46-10・11、pp.19-34。
- 陸根和(1995)「太宰治『律子と貞子』論一愛に敗れた者へのいたわり」『解釈』41-12、pp.23-29。